

第 2 分科

「シニアの元気はまちの元気」

小川 全夫

(九州大学名誉教授、NPO 法人アジアン・エイジング・ビジネスセンター理事)

〔パネリスト〕

- 岡本 雅 「貴和の里につどう会」(山口県下関市菊川町) 事務局長
下村 恵美子 宅老所「よりあい」(福岡市中央区) 代表
本徳 輝樹 (有) インテリア家具ほんとか (福岡市中央区)
櫻井 正哉 福岡市老人福祉センター「福寿園」(福岡市西区) 園長
書 記
塩川 るみ NPO 法人アジアン・エイジング・ビジネスセンター



小川：今日は、九州・山口のさまざまな取り組みを皆さんとともに学びながら、高齢者の活躍する場としての地域づくりを考えていきたいと思います。

まず、それぞれからご報告をいただきます。

岡本：海を渡ってというと大げさになりますけれども、関門海峡を渡って今日ここにまいました。73 歳になり、自分では年だとは思っていませんが、妻からいつもあんな年はいくつかねと言われ、ちょっとは考えないといかんとするときもありますが、ちょっと思うだけで、普段はきれいに忘れております。

20歳の時から酪農をやっており、今朝も乳を搾ってきました。酪農を続けて53年になります。

その間、ベルちゃんマークの牛乳製品やヨーグルトを作っている山口県酪農協同組合に常勤で20年ぐらい勤め、一昨年で身を引きました。

現在、酪農をやりながら仲間とともに村おこし運動をやっています。男性が弱くて会になかなか入ってこない、女性が活躍しているというのは他の地域と同じですが、今日はそのような中で、高齢化が進む田舎で村おこし運動に取り組んでいる状況を紹介したいと思います。

私たちの集落は、下関市菊川町の東端の山間地帯にあります。

下関市から27km、菊川町の中心地からは一山越えて8kmぐらいのところにあります。中国自動車道的美祢西インター、小月両インターから車で10分程度ですので、わりと利便性はあります。

山間なので、農地は狭く、谷間に点在し、鹿や猪の被害で耕作が放棄された農地がたくさん出てきております。

3つの集落からなる貴和の里は、戸数55戸、総人口145名で、多いときの約半分になっています。男性64名、女性81名です。

高齢化率は47.5パーセントで、高齢化が進んだ地域です。

限界集落という言葉は大嫌いですが、高齢化50%の地域をそう言うとなると、あとわずかでそこに達します。

そういう中で、定年退職をした者が数人で、このままではいけない、どうにかしたいということをよるとさわると話し合っていました。腰がなかなか上がらない状態でした。

響井分校というのがあるのですが、平成20年3月で廃校になるのでうまく使えないかという話が山口県立大学の坂本先生などからあり、それでやっとな腰が上がり、ひとつ組織を作ろうかということになりました。

有志による会合が何回かもたれ、19年の6月に準備会ができ、どんな目的でやるのか、誰がやるのか、会員はどうして募るのか、経費はどう賄うのか、喧喧愕愕意見を出し合って組織名や会則を練り上げました。

事業内容としては、まず先進事例を学ぼう、村の調査やアンケートをやろう、手近なイベントをやろうという計画を立て、20人の会員で発足しました。

響井分校というのは歴史と由緒がある学校で、発祥は江戸時代にさかのぼります。昭和52年に100周年を迎えました。その小学校名を頂戴して、われわれの会を「貴和の里につどう会」と命名しました。

会の目的は、地域の活性化と、遊休施設での拠点造りを目指す、ということ掲げております。

その目的の達成のために、

- (1) 地域に住む人達により、村の歴史や文化を再度掘り起こし、その良さを再発見する
- (2) 荒廃しつつある農地や自然あふれる山林を活用する
- (3) 町の人達に筍掘りや加工体験・田植えや稲刈り・芋掘り・餅つき、山の散策等いろいろな田舎体験をしてもらう
- (4) そのことを通じて、町の人達と自然豊かな山村を守る意義を認識し合い、共生の喜びにしたい

を実施することにしております。

地域住民にこの計画と内容を理解してもらい、お蔭さまで **85%**以上の家庭に入会していただきました。

さっそく山口県の「高齢者参加型コミュニティ創設支援モデル事業」(現オパール・プロジェクト)に応募し、多数の難関を突破して、採択された **5** 団体の一つに入りました。

19 年度の活動として、以下のことを実施しました。

- (1) 運営会議 (月 **1** 回ペース)
- (2) 先進地視察 (**2** ヶ所)
- (3) イベントの開催 (芋掘りと試食)
- (4) アンケート調査の実施、
- (5) 講演会の開催
- (6) 竹林改良の実施
- (7) 反省会と次年度計画立案

(2) の先進地視察では、同じ廃校の活用を行っている周南市の大田原自然の家と美東町桂岩ふれあいセンターを視察しました。

(3) のイベント開催では、会員によるサツマイモの植え付けを実施しました。**800** 株は多すぎるかもしれないと心配しましたが、秋の収穫時期には子供達も参加し、たちまちのうちにほりあげました。

また、**12** 月には貴和の里内にある猿王岳登山をしました。標高 **270m** 程度の山ですが、登山道の整備状況の調査も兼ねて行いました。

(4) のアンケート調査は、地域の方々の現状を知るとともに、今後の活動の方向性を知るために行いました。

調査内容は居住世帯用と帰省世帯用とし、帰省者が正月休みで帰って来る **12** 月末に、各運営委員が一軒一軒訪問して配布し、**1** 月 **10** 日に回収しました。

帰省者用の質問の中の興味深い例として「将来集落に帰ってこようと思いますか」の問いに対し、約 **60%**の方が帰ってこようと思っているとの回答でした。

30代40代の人達がそう考えているということにわれわれは力強く思い、帰ってこられるような環境づくりを行わなければならないと改めて思いました。

(5)の講演会では、南こうせつさんのお兄さんで、歌う辻説法で有名な大分市の曹洞宗勝光寺住職の南慧昭(みなみえしょう)先生を招き、「心の健康」をテーマに2時間程度、座禅と歌を交えながら熱演いただきました。

(6)の竹林改良は、山口県は竹林面積が全国で4番目で、われわれの地域でも現金収入となるタケノコを得るために竹の栽培が盛んだったのですが、中国からの輸入品に押されて、放置竹林が増え、竹が密集して歩けない状態になっているため、その手入れを行ったものです。

翌20年度には、国土交通省の『新たな公』によるコミュニティ創生支援モデル事業に採択され、「廃校・空き家と耕作放棄地を活用した田舎体験プロジェクトによる都市農村交流と人口定住」というテーマで、以下の三つの活動に取り組みました。

- (1)「地域塾」の開講とアンケート
- (2) 廃校・空き家及び耕作放棄地の調査
- (3) 空き家・耕作放棄地の活用方法と整備

(1)では、廃校を利用して町の人々と交流する「地域塾」を10回開講し、アンケート調査を行いました。

(2)では、廃校・空き家及び耕作放棄地のマップづくりを行いました。

(3)では、空き家を借り受け、宿泊施設としての活用を計画しました。

また、最近はどここの田舎でもそうですが、耕作放棄地があちこちでできてセイタカアワダチソウやカヤが2メートルぐらい伸びてイノシシや鹿のすみかになっています。

景観上も悪いので、ほんとうは作物を作ればいいのかもしれませんが人手もないので、ヒマワリやコスモスといった景観植物を植えることにしました。

同じ20年度には農林水産省の「農水省の農山漁村地域力発掘支援モデル事業」にも応募し、こちらも5カ年事業として採択されました。

貴和の里にどう会・きくがわ竹林ボランティア・道市営農組合・菊川総合支所地域政策課・菊川総合支所農林課・下関市社会福祉協議会菊川支所・地域共生ホーム中村さん家・豊関むらおこし応援団・山口大学生生活空間デザイン研究室といった多彩の顔ぶれの9団体が集まり、「貴和の里活性化協議会」を設立しました。

初年度はまず「ふるさとづくり計画書」を作ることを始め、「まちからも応援を得て活気と笑いのよみがえる竹源郷づくり」をテーマに掲めました。

竹源郷というのは、竹が多いのでそれを使ったふるさと作りをしようと考えたわけです。

計画づくりとあわせて、以下のような実践活動を行いました。

- (1) .過繁茂して困る孟宗竹を利用した活動
竹林伐採・竹炭材づくり・竹の粉碎作業などを実施。
- (2) .耕作放棄地の有効活用
景観作物を植えることを行いました。
- (3) .まちとの交流で農業体験
地域塾を拡大した交流会の開催
- (4) .空き民家・廃校を活用した田舎暮らし体験
空き民家を改修し、囲炉裏・自在かぎ・かまど・竹天井を昔風に再現し、五右衛門風呂も設置して薪で沸かすようにし、宿泊可能とし、「貴和の宿」と命名しました。

21 年度も、国土交通省事業と農林水産省事業を続けており、上記事業を少しずつ充実させています。

難問はいろいろありますが、自分たちのやれることは自分たちでやろうと思っています。高齢者は誰でもなにか特技を持っていますので、それを活用していろいろやっています。

地域外の方々にも参加してもらっていますが、ただ来て楽しむだけではなく、作るまでの苦勞にも参加していただきたいと思っています。

小川：定年退職をしたあとでも仕事をしようと思えばたくさんあるということですね。

岡本さんたちまず、不要と思われていたものを必要なものにするということをやっておられます。そうすると見る視点も変わってくる。

また、昔は、上意下達といわれていたように、メニューは行政が考えて住民にそれをあてがっていました。いまは逆です。自分たちで考えて提案し、それにお金が出るという提案型の時代です。

岡本さん達は、国、県に事業提案を行ってお金を取ってきて、それを原資に活動しておられます。今日ご参加の皆さんにも、参考になる活動だと思います。

それでは次に、福岡市西区の老人福祉センター「福寿園」所長の桜井さんからご報告をお願いします。

桜井：老人福祉センターは福岡市立の施設で、市内に 7 カ所、各区に一つずつ設置されております。

センターの目的は、高齢者に関する各種相談事業、健康の増進、教養の向上及びレクリエーションのための便宜を総合的に供与することにあります。

利用対象は福岡市居住の 60 歳以上の皆さんで、利用料は無料となっております。

以前は福岡市が直営で運営を行っていましたが、2 年前から指定管理者制度ということで、民間が行っております。福寿園は、私ども社会福祉法人福岡ケアサービスが委

託を受けております。

民間委託となってから、各施設の利用者がアップしており、福寿園の利用者は1日約400名、年間で約11万3千人となっております。

施設には、休憩室、囲碁将棋室、和室、研修室、大広間、機能回復訓練室があり、また4階屋上には、広い展望風呂があり、地域の皆さんに大変喜ばれています。

本施設には、NPO法人AABCの紹介で韓国からの視察団が訪れ、踊りの交流会を行ったり、地域の青少年との交流ということで、毎年お正月に、隣にあります福岡市立西陵高校管弦楽部に来ていただき、新春コンサートを開催いたしております。

また1年を通してカルチャー教室が開かれており、65教室あります。内容は、お花、三味線、俳句、韓国語、中国語、英語、水彩、写真、カラオケ、太極拳など、じつにさまざまです。それぞれ週に1回、月に4回開催されており、これも無料です。

特色として、カルチャー教室の先生は、市内に在住の60歳以上の方で、平均年齢は72歳です。

先生方はそれまでの仕事で得られた知識とか、玄人はだしの趣味の腕を生かし、ほとんどボランティアで教えておられます。先生方は非常に元気で、生徒さんが風邪などで休むことはしょっちゅうありますが、先生が具合が悪くなって休講ということはほとんどありません。社会と積極的に関わることが高齢者の心身にどれだけ大切かということを感じています。

その中から二人の先生の活動をご紹介します。

81歳のY先生は水彩画の先生で、約30名を教えておられます。非常にお元気で、国内外にスケッチに行かれておられます。できあがった作品を施設の廊下に飾っていただき、そのコーナーを福寿園画廊と呼んでおります。福寿園のカルチャー教室は1年で卒業ですが、先生の教えを受けた生徒達が集まって絵画サークルを作り、毎年展覧会を開催しています。

もう一人のY先生はハーモニカの先生で64歳。約40人の生徒を教えています。福寿園の教室ばかりでなく、路上ライブを行ったり、中国との交流を行ったり、地域の若者にも楽しさを教えたりと、積極的な活動を行っておられます。先生の教室はいつも満員で、生徒は抽選で選んでおります。

高齢者の関心も変化しており、最近では、体力づくりに非常に強い関心をもっておられます。当園では介護予防の講座を各種行っておりますが、募集するとあっという間に埋まります。福岡市が開発した「祝いめでた体操」というのがありますが、腰や膝に非常にいいようです。みなさまもぜひ一度やってみられるようお勧めします。

またコンピューター教室も非常な人気で、5倍から10倍の競争率になっています。抽選に外れても、何遍でも応募する方がたくさんいらっしゃいます。

新しい教室への要望も少しずつ出てきています。たとえば、エレキギター、フォークソング、ピッコロ等などの要望が出ています。

その他に環境美化活動ということで、福寿園を花と緑で潤していこうということをやっております。施設の場所は市の郊外にあり、ご自宅の畑から季節の花や野菜を持ってこられ、利用者で分けてくださいという方がたくさんおられます。園芸を通じ、皆さんの土に対する思いの強さを感じております。

このように、老人福祉センターではさまざまな事業を通じて高齢者の方々に社会参加の機会や場所を提供し、元気な高齢者がすこしでも増えていくようサポートしております。

小川：老人福祉センターは全国各地にあり、運営の仕方はさまざまです。

韓国や中国にも同様の施設があり、たとえば韓国では敬老堂と呼ばれています。儒教の影響が強い韓国では、男性と女性と活動する場所は別々です。お昼になると真ん中のしきりが開き、一緒になることもあるのですが、基本的には性別で活動の場を分けています。

福寿園の取り組みで素晴らしいのは、日本の童謡には「雀の学校」と「メダカの学校」がありますが、「雀の学校」はムチをふりふりで怖いですね。ところが「メダカの学校」では、誰が生徒か先生かということで、高齢者は先生にもなれるし生徒にもなれる。それを実践しています。これからの高齢社会では、こういう取り組みを進めることが必要です。

先ほどの貴和の里のお話で、廃校を使う、荒廃地を使うという話がありました。要らないと思ったものが、実は資源なんだということですが、福寿園の素晴らしい展望風呂のお湯は、隣のゴミ焼却場の廃熱を利用しています。それを外国人に説明するとびっくりしますが、そういう工夫をいろいろなところでやっていくことが大切だと思います。

では3番目の報告として、宅老所「よりあい」とご近所応援団について、下村代表から願います。

下村：いままでのお話は、最後まで、元気でハツラツといきましょうというお話だったのですが（笑）、願いはそうであっても、なかなか最後までそうはいかないということがあります。

しかしもの忘れが始まってボケが出てきても、家族に囲まれ、近所の人に理解されながらその人らしく生活が送れたら、ボケになることもそう忌み嫌わなくてもいいのではないかと考えています。

中央区の唐人町で「よりあい」をはじめて18年になりますが、設立当初から地域のボランティアに支えられてやってきております。建物は100年近い民家を改造して使っています。

ボランティアは9団体7～80名のご近所の方々に、主に昼食づくりを手伝ってもらっています。

最高齢は 84 歳で、その方は「俺は絶対にボケない」とおっしゃっていますが、もうそろそろ (笑)。たとえそうだったとしても、ここに参加されていたら安心だなと思ってみんなで見守っています。

元気でなくなっても安心できる地域とはなんだろうということを考え、「ご近所応援団」を作りました。これは、お年寄りが困っていることに対して、地域みんなが集まって動こうという会です。出来て 4 年半になります。その会から「出会い祭り」という 1000 人規模の地域のお祭りもやるようになりました。

「ご近所応援団」は唐人町の中学校区を対象にしています。お年寄りはいなくなっただいたい 15～30 分だと中学校内にいるので安全に見つけることができます。中学校区にそういう人のつながりができれば、みんなで助け合うことができます。

これからご覧いただくビデオは、「ご近所応援団」活動が NHK で放送されたものです。

今日おいでの本徳さんは、「ご近所応援団」の会員さんで、唐人町のお布団屋さんの若旦那です。いなくなったお年寄りを探すのに駆けつけてくれたり、ボケのお年寄りの添い寝をしていただいています。

元気ではつらつとしたお年寄りが出てくるビデオではありませんが、こういうふうを支えれば安心なんじゃないかという取り組みの紹介です。

(ビデオ)

「ホリデーにつぼん 老いの笑顔は街とともに ～宅老所“よりあい”の日々～」

(NHK 総合 2009 年 4 月 29 日放送)

福岡市の介護施設・宅老所『よりあい』には、重い認知症のお年寄りが通ってくる。徘徊してしまう人や家族の介護を望めない人などを地域とともに支える日々を見つめる。

福岡市の介護施設・宅老所「よりあい」では、重い認知症のお年寄りや、介護に行き詰まった家族を支えている。この冬、施設に難問が起きた。介護する家族が入院し、近所に身寄りがいなくなったお年寄りを預かることになったのだ。しかし施設には、24 時間ずっと介護する余裕はない。そこで、地域の人たちに見守ってもらう取り組みを始めた。お年寄りをどう支えていくのか？ 家族や地域とともに奮闘する施設の日々を見つめた。(NHK ホームページ)

小川：たいへん感動的なビデオでした。

宅老所「よりあい」の取り組みは、福岡発の新たな介護の姿として非常に注目を集めており、厚生労働省がその取り組みをいろいろ検討して制度化するというも行われております。

ここに描かれている姿は人ごとではなく、われわれの問題でもあります。日本は現在100歳以上の高齢者が4万人以上もいる長寿の国ですが、その方々が全員認知症をまぬがれているかという、そうではありません。住み慣れた地域で暮らしていくというエイジング・イン・プレイスの理想に掲げたとしても、かけ声だけではだめで、自分の生活の中にこういう活動に関われる時間をどう作っていけるかが重要で、またそうすることができれば、そのまちはみんなが安心して暮らせることができる、そういうお話だったと思います。

実際に認知症の方の添い寝をされた本徳さんにお話をお聞きします。

本徳：唐人町商店街で布団屋をやっています。商店街を活性化しなければならないと思って応援団に参加しています。添え寝は私だけではないんですが、前にも一度添い寝を頼まれて、ビデオは2回目のときで、たまたまテレビの取材が入りました。ですが、ものすごく嫌だった（笑）。何もするわけではないのですが、寝られないし、精神的にも疲れるし。

しかし、こういう活動が安心安全な地域づくりに繋がり、唐人町商店街がいいところだなということになって、人が出て行かない、新しい人が入ってくる、そうしたら商売もうまくいくだらうということでこういう活動をやっています。

小川：これまでの三つの報告を聞いて、パネラーの方々同士でコメントをお願いします。

岡本：びっくりしたのは、町の中にも、私たちと同じような境遇がたくさんあるということです。下関市のマンションが高齢化したマンションになっているということを知ったことがあります。田舎だけの問題ではなく、都市でも共通の悩みを持っていることがわかりました。こうした情報交換を通じて問題解決を探ることが重要だと思いました。

桜井：貴和の里の取り組み聞いてうらやましいと思いました。自分たちで発想してそれがどんどんひろがっていく。われわれのところは指定管理者制度ということで、自由な発想がなかなか出てこないのですが、もっと知恵を搾って、市にも働きかけていかないといけないと思いました。

「よりあい」は衝撃的でした。まち全体が住みやすくなるように、われわれもこういった問題を見据えていきたいと思っています。

下村：一度「よりあい」を訪ねてこられた方が、「よりあい」は介護を通じてコミュニケーションを作っていく取り組みのように思うとおっしゃっていました。

田舎では人がいなくなっていく、都会のように人が集まっているところでもキレギレになっていて、それを介護の事業所を通じて結びつけることやっております。

これはそんなにたやすいことではなくて、山口県の取り組みを見て思ったのは、自分のまちだと思えば、わたしたちのところでも、みんなもっと踏み込んでいけるのではないか。というのは、まだ、人ごとだというところがあるようなので。

なぜ「ご近所応援団」を始めたかという、「よりあい」の前の道を地域の役員の方々が通られて、「なんかあればここに雪崩れ込めばいい」という声が結構聞こえるんですね。会議でも「頼んどくからな」とか言われたりするんですが、われわれのところは受け入れのキャパも少ないし、それよりも皆さんここに入らないでいいような安心のまちを作ろうじゃないですが、入るまでに自分たちの力すべきことがあるんじゃないかと言っています。

老人福祉センターで1年働いたことがあります、自分の人生を謳歌され、毎日通って来ていたおじいさんがいて、「自分は一生一人で生きる」「最後まで元気である」とおっしゃっていた90いくつの方が、ある日から突然来なくなった。お嫁さんに聞くと脳梗塞で入院して、たぶんもう帰ってこられないという話でした。

元気な方でもいずれそういうときが来ることもあるので、この問題を話題や関心から遠ざけないで、いっしょに考えていくことが大事だと思います。

本徳：介護のことで初めて知り合ったのが「よりあい」で、ここが当たり前だと思っていましたが、すごいところだったんだなあと改めて思っています。

小川：家庭で介護できなくて困っている方を支援する取り組みとして「よりあい」が生まれて来たわけですが、貴和の里のプロジェクトの中でもちょっと紹介がありましたが、農村で同じような取り組みをされている「中村さん家」（なかむらさんち）の方が今日見えておられますのでご紹介をお願いします。

中村さん家：地域共生ホーム「中村さん家」です。

5年前に立ち上げるときに、「よりあい」を視察させていただいております。

緊急の時とか助けて欲しいときに、身近な人が身近な場所で助けられるようにしようというのがはじまりです。

田舎ですので、高齢者だけでなく、障害者や子供も対象としております。

高齢者向けとしては15名定員のデイサービスを行っており、緊急時にはお泊まりができます。

子供たちには「児童クラブ」として、小学校から「ただいま」と言って帰って来られる場所、若いお母さん方にとっては、自分が買い物や病院に行くときに、子供を一時預かりできる場所としています。

一時預りは1時間500円で、子守役として元気な高齢者に登録してもらっています。

また料理や送迎の運転手としても手伝ってもらっています。

夏休みには子供が 10 人ぐらい一日中おりますので、「地域塾」といって、折り紙を教
えてもらったり、先生をしてもらったり、戦争の話をしてもらったり、大工仕事を一緒
にしてももらったりしています。

ビデオに比べると比較的元気な方が泊まったり、子供が遊んでいたりする場所になっ
ています。

小川：中村さん家は民家を借り上げ、高齢者のケア、子供のケアといったバラバラで形
ではなく、総合的に取り組んでいます。これは高齢社会を生き抜く新しい発想だとい
えます。

近代社会とは分業体制に基づく社会で、それは専門性と結びついています。日本のよ
うに人口減少段階にある社会では、あまりに複雑な分業体制はそれを担う人の不足をも
たらすという構造的な問題をはらんでいます。

そのときの解決策は、分業ではなく統合です。包括的なサービスにしていかなければ
なりません。

困っているとき人に任せればいい、専門家に任せればいいというのは近代社会です。
これでは、これからの高齢化社会を生き抜くことはできません。問題を自分の問題に引
き込む考え方を成長させていく必要があります。

それでは会場からご質問ご意見をお願いします。

会場（男性）：平成 18 年まで、小川先生の市民講座等で地域福祉を学びました。

その中で、下村さんの「よりあい」のお話もお聞きしました。

また、これからの高齢社会では、地域福祉活動が重要なこと、自助・公助・共助の中
の共助として、地域住民によるボランティア活動の必要性についても学びました。

下村さんにお尋ねしたいのですが、「よりあい」の取り組みにたいへん感動したのです
が、地域住民のエネルギーをもらうためどのような工夫をされてきたのか。いきなりパ
ットというのはなかなか難しいと思います。あそこまでたどり着くのどのような取り
組みをされてきたのかをお尋ねしたい。

また貴和の里について、ゼロからスタートするときには地域の組織である自治会や社
協や民生委員の協力がぜひ必要だと思いますが、そういうところの協力を得るためには
難しさがあつたと思うので、そこのところをお聞かせいただきたい。

私のところは 35 年前にできたサラリーマンばかりが 800 世帯住んでいるマンモス団
地で、まさしくいま限界集落になりつつあります。

自治会長になったとき、老人クラブ会長になったとき、地域の活動が必要だと口をす
っぱくして言ってきたけれども、いくら言っても理解をいただけず、非常に悩んでお
ります。

下村：運が良かったのは、最初にたびたび行方不明になったヨシエさんは、20 年間唐

人町で民生委員をされていて、とても尊敬されていた方でした。民生委員や行政の中でも知らない人がないという有名な方でした。他の施設を追い出されて行くところがなくて「よりあい」にたどり着きました。その方が困っている。20年間心からお世話をしてきたまちなのに、たびたび行方不明になるようになって誰も手助けしないのだろうか、それはないだろうということです。

ただ、まちの役職についている方々は、いろいろな仕事があつて首が回らずため息をついている状態だということも分かっている、相談に行っても実働的な動きにはならないだろうと思いました。しかし町内にはヨシエさんのお世話になった方がたくさんいらっしゃいますから、ヨシエさんのためだったら時間を使わなければならない、1時間、2時間探しますよという人がたくさんおられて一番頼りになります。またその人達だったら、ヨシエさんでなくても駆けつけてくれるだろうという発想です。

そういう顔を見える協力体制を作ろうと思いました。町の役員の方々はほんとうにアップアップですので、後で個人参加で入ってもらおうと思いました。

「ご近所応援団」は、毎月1回、仕事が終わった夜に例会を行っていますが、来てもよいし来なくて責められない集まりです。多いときで40~50人、少ないときは20名ぐらいでやっています。会長はヨシエさんと10数年一緒に民生委員をされてきた方です。

その集まりでは、一般的な困っているお年寄りというような話題は一切出ません。何丁目何番地の困っている誰々さんという個人の名前を出して、カギをよく無くして困っている、でも近くに身内がない、ではどうするというふうに、この人のために働こうということをやっています。

自分がこのまちに住み続けたいのであれば、動けるときに一緒に協力しましょう、でないと自分が困っていざそのときに助けを求めても、誰もいないかもしれない、「よりあい」も潰れているかもしれない、といって脅しをかけています（笑）

介護の問題は先に先に追いやりたいという気持ちがあるようですが、いまのうちに一緒に考えていこうということをやっています。

本徳さんはなにも関係がなかったのですが、連合会長さんが紹介してくれお会いしました。

商店街も空き店舗が目立ってきています。若者は郊外の大型店に車で行ってしまふ。商店街はお年寄りがウロウロするまちでないとさびれてしまふ。車を押してなんとか買い物に来るお年寄りや子供がいるまちでないと商店街も栄えないから一緒にやりましょうということに参加してもらいました。

小川：下村さんのお話には固有名詞が出てきますが、これが重要だと思います。つまり個と名前を隠してなんのコンミュンかということです。自分たちの生活を守るためには、自分たちの生活をさらけ出さなければならぬ。

さきほどのビデオで、徘徊するお年寄りとその娘さんが二人で、ご近所のいろんなところを回って、お年寄りに声をかけてくださいとお願いするシーンがありました。こういう行動ができるかできないか。

社会学ではいまの社会を「匿名社会」と呼んでいます。個人情報保護法によって、現場の民生委員さんたちにも個人の名前と顔を教えてもらえない社会です。

自分たちの暮らしを守るためには、自分の情報の自己開示ができるような環境をつくらなければならないと思います。

岡本：活動を立ち上げるとき、地域のいろいろな組織や住民の理解と協力を得るためにどのようなことをやってきたというご質問だったと思います。

まず、なにかをやろうというときに、行政に相談して事務局を頼んでということが多かったのですが、われわれの場合、行政に全然頼りませんでした。

また、われわれの集落でも3つの自治会があり、全体をまとめてからという話もあったのですが、それでは立ち上げて何もしないうちに潰れてしまうだろうと思い、有志だけで立ち上げました。

また、全国紙3氏、地方新聞、テレビといったマスコミにことある毎に情報を提供し報道を積極的にしてもらいました。その結果、行政も知らない顔ができなくなったようで、最初は鼻であしらう態度だったのですが、最近は向こうからやってくるようになりました。また住民も関心を持ってくれるようになりました。

活動の中で、たとえばオニギリとみそ汁を50人分作るため2,3人に声をかければすむのですが、そうすると、わたしに声がかからなかったとって除け者にされたと感じる人がでてきます。それでみんなに声をかけるようにしています。そうすると50人分のオニギリとみそ汁を作るのに十数人出てきます(笑)でも出てきてやるのが楽しいんですね。「この忙しいのに」と言っているのはじつは本音ではなく、誘ってくれとっているのではないかと最近思っています(笑)

小川：「全員いっせいに前に進め」という号令方式がこれまで多かったのですが、これからの基本は「この指とまれ」方式で、志を共にする人が取り組むことだと思います。

ただ注意しなければならないのは、仲間はずれにされたと思わせないように、周りへの声かけが重要だということですね。地域全体がメディアに評価されるような仕掛けも重要です。なにかやろうというときの最大の野党は、じつは身内にあります。地域活動する奥さんの最大の敵は夫です。家にいるから家内ではないかと言われてたりするんですね。またご主人が頑張っていると、外面ばかり良くて奥さんから言われたりします。

それをなだめる方法として、周りまわりの人から褒めてもらうという手があります。お宅の御主人はほんとうによくやっていると耳に入れてもらう、そうすると奥さんも和らぐ、そういう智恵も必要ですね。

会場（男性）：われわれ高齢者も、人に役に立つ行動をすれば元気になります。また福岡市では、カエルもオタマジャクシも見かけなくなりました。

貴和の里ではどうでしょうか。報告を見ていて自然を大切にすることが重要もっと大切ではないかと思いました。

小川：都会の高齢者と田舎の高齢者同士が交流をして、昔はこんな環境だったということのを思い起こしてもらい、都市でもそれを生かしていくことも重要だと思います。

会場（男性）：朝倉市で介護の仕事をしています。10日ほど前、施設を出た方がいて、職員がチームを作って連絡を取りつつ1時間ほどで発見したのですが、今日のお話で、いかに施設との連携が大事かが分かりました。

もっともっとわれわれの施設と地域、それから行政が連携して高齢者を支えていく取り組みを進めなければならないと思い、非常に参考になりました。

小川：福祉施設、地域社会、行政と一緒に物事を解決していくような仕掛けがないと、それぞれだけではいくら頑張ってもなかなか問題の解決につかないということだと思います。これからそういうことがますます重要になっていきます。

今日の分科会は「シニアの元気はまちの元気」というテーマでしたが、元気な方もおられれば、健康度が低下された方もおられます。連続したその人の人生を考えれば、われわれも同じ歩みをたどっているわけです。

そんな状態になっても、その人に残された元気を最大限に活用できるまちであれば、非常にいいまちになるし、まちの元気もでできます。

そのためには、「あれをしてくれ」「これをしてくれ」と要求するだけではだめです。

なにかあったら医者や福祉の専門家に頼めばよい、まかせっきりというのでは良くない。まず自分になにができるかを考え、少しでも自分の関わりを持てることを見出し、そこに自分の人生の中の、ごく一部の時間でもいいから使う。自分の時間を寄付する。それがボランティアです。みんながそういう生き方をするようになり、地域社会の中に新しい関係性を見いだしていくことが重要です。それが集められて、その社会の大きな力になります。

貴和の里では、自分たちで事業計画を作り、それを県に突きつけて資金を獲得し、また国にも要望を出す。その次に来るのは、もしかすると自分たちの仲間からより強い支援を獲得してやっていくことかもしれません。

自分たちと同じ問題が都市の中にもあるのかと知ってびっくりしたとおっしゃっておられましたが、実は日本の社会では、都心でも、郊外の住宅団地でも、団地の高層マンションでも、農村の過疎地域で起こっていたことが起こりはじめていて、どこに住ん

でいても逃れることができないというのがこの高齢化です。

貴和の里の取り組んできたことが、いずれ自分たちでやろうとしたときの参考となるんだというメッセージを受け取ってもらえれば、大きな実りをもたらすのではないかと思います。

福寿園では、あるときは生徒となり、あるときは講師として、お互いの元気を引き出す活動を行っておられました。このような場を用意し、人と人とのつながりの機縁をつくりだしていくことは高齢者の元気な活動を進めて行くにあたって大変重要なことだと思います。

また宅老所「よりあい」とご近所応援団の活動ですが、認知症の解決法はまだ発見されておられません。しかし待ったなしの形で自分の周りに起こっており、いずれ身内、友人、自分にも起こって来るかもしれません。そういうふうにならない努力をするだけでなく、もしそうなったとしても暮らして行くことができる環境を作ることがいかに大事かということを教えられました。

高齢化の中でシニアの力を引き出すためには、周りの人のたちとの上手な関わり方が問われているのだと思います。

実りのある教訓をたくさん得ることができた分科会ではかったかと思います。

今日は長い時間ありがとうございました。

